

〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉

—イブン・タイミーヤ『ファトワー集成』より「奇妙な者たちに幸せあれ」ハディース注解論考の翻訳と解題—

石 郷 岡 宏 記

序

本稿は、ハンバル学派のイスラーム学者イブン・タイミーヤ（1263-1328）が、預言者のハディース「イスラームは奇妙なものとして始まった。そしてそれはまた始まりのような奇妙なものに戻るだろう。奇妙な者たちに幸せあれ」について注解した論考を訳出し、解題を付したものである。後に述べることになるが、イブン・タイミーヤの手になる本論考は、イスラーム国やアル=カーイダ等のジハード主義組織の思想を理解する上で極めて重要な文献であり、その思想は現代のみならず将来的な「ジハード運動」にまで通ずる長大な射程を持つ。そこで本論考を全文訳出し、ジハード主義思想・政治運動の文脈で読解する解題を以て、その現代的意義を明らかにしたい。本稿はこの訳者による序文に続き、イブン・タイミーヤの原典を訳出した第一部と、訳者解題を付した第二部から成る。

凡例

- 一、翻訳には底本として、Taqīyuddīn Ibn Taymīyyah. 1989. “Kalām Sheikh al-Islām fi al-Ghurba wa al-Ghurabā,” in *Al-Ghurba wa al-Ghurabā*, ed. Salīm ibn ‘Iīd al-Hilālī et al., 39 – 59. Dammam: Dār al-Hijrah lil-Nnashr wa al-Tūziā’. を使用した。また、中田（1988）の邦訳も参照した。
- 一、段組みや改行、体裁は可能な限り原文に近づけて訳出したが、一部日本語として不自然なものは適宜変更した。
- 一、クルアーン、ハディースともに全文拙訳を使用した。クルアーンは中田考監訳『日亜対訳クルアーン』（作品社、2014）を主に参照したが、適宜訳し変えた箇所もある。クルアーンから数節を連続して引用している箇所については、一節を句点でつなぎ、節末で読点を打ちアーヤの区切りとした。
- 一、底本ではクルアーンの引用部分がボールド体で書かれているため、拙訳でもクルアーンからの引用部分については「 」内に太字で訳出し、ハディースからの引用部分については「 」内に訳出し、典拠を註で指示した。また文中で意味を補った〔 〕内の補足は筆者によるものである。
- 一、原註、訳者による註釈は通して番号を振り、原註のみその旨を記した。

第一部：翻訳

『ファトワー集成』より「奇妙な者たちに幸せあれ」ハディース註解

タキーユッディーン・イブン・タイミーヤ著

イスラームの師、イブン・タイミーヤは『ファトワー集成¹』の中で、預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）が言われた次の真正ハディースについて述べた。

「イスラームは奇妙なものとして始まった。そしてそれはまた始まりのような奇妙なものに戻るだろう。奇妙な者たちに幸せあれ²」。

しかしだからといって、仮にイスラームが奇妙なもの＝少数派となったとしても、アッラーへの信仰を捨ててよいということを経結するのではない——アッラーがそれを禁じている——。そうではなく、それは至高なるアッラーが言われたとおり、「イスラーム以外の宗教を欲する者は決して彼から受け入れられることはない、彼は来世における失敗者である³」。

また至高者⁴は言われた。「真にアッラーの御許の宗教はイスラームである⁵」。

また至高者は言われた。「信仰する者らよ、真の畏怖をもってアッラーを畏れ身を守れ、そしてムスリムとしてでなければ死んではならない⁶」。

また至高者は言われた。「おのれを卑しめる者以外に誰がイブラヒームの宗旨から離れようと望むのか、確かにわれらは彼を現世で選んだ、彼は来世では義人たちの一人となろう。御主が彼に帰依せよ、と言われたとき、彼は諸世界の御主に帰依いたしました、と言った。イブラヒームは彼の子孫にこれを言い残し、ヤアクブもまた語った、わが子孫よ、真にアッラーは汝らの宗教をお定めになった、ゆえに、ムスリムとしてでなければ断じて死んではならない⁷」。

この宣明については、すでに別の場所で説明し、われわれが明らかにしたように、スーフからキリストに至る預言者たちの伝えた宗教はすべてイスラームであるのだ。

ゆえに、イスラームが奇妙なもの＝少数派として始まったときも、それ以外の宗教は受け入れられなかった。それは真正ハディースで証明されている——預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）は言われた。

「真にアッラーは地上の民に目を遣われ、啓典の民の末裔たちを除いて、アラブであれ非アラブであれ、彼らを憎まれた⁸」。

この言明は、[イスラームが] 奇妙なもの＝少数派になったとき、その教えをしっかりと守っている者が不幸になる、ということを経結するのではない。彼らは最も幸せな人々なのだから。それは、ハディースの中で「奇妙な者たち＝少数派に幸せあれ」とアッラーが言われているからである。

なぜなら、〈幸せ〉という語は、良いという語から来ており、至高者も、「信仰

し善行をなす者たち、^{トゥーパー}幸せが彼らにあり、善美な帰り処がある⁹』と述べられているからだ。つまりそれは、[イスラームが]奇妙なもの=少数派であったときでも、それに従った最初期の先達たちと同じなのだ。

そして、彼らが人々のなかで最も幸せだったのである。

また、来世について言えば、彼らは預言者に次いで人々のなかで最も高い位階にいる。

あるいは現世においても、至高者が言われたように、「預言者よ、汝らにはアッラー、そして信者たちのうち汝に従う者がいれば十分である¹⁰」。

つまり、預言者とその従者にはアッラーだけで十分だったのである。

また至高者は言われた。「^{まこと}真に私の後見はアッラー、啓典を垂示し給うたおかた、そしてかれは正しい者たちを庇護し給う¹¹」。

また至高者は言われた。「アッラーはかれの下僕に万全な御方ではないか¹²」。

またこう言われた。「アッラーを畏れ身を守る者には、かれが出口を成し給う。思いもかけぬところから恵を与えられるのだ、アッラーを信頼する者にはかれは十全であられる¹³」。

このように使徒に従うムスリムにとっては、至高なるアッラーだけで十全かつ充分なのであり、いつどこにしようと、アッラーが彼の庇護者であられる。

それゆえ、不信仰の地にいても、ムスリムたちはイスラームを掴み離さない限り、たとえ彼らの罪により不幸に見舞われることもあるにせよ、彼らには幸福がある。多神教徒や啓典の民でさえ、イスラームを実践しているムスリムを見ると、彼を称え、敬い、褒められたものではない行為であっても免責するのである。

ムスリムにとってこれは、イスラームの始まりにおいても、またいつの時代においても同じなのだ。

現世において人々が災厄に見舞われることは避けられないが、ムスリムの身に起こる災厄はより少なく、より多くの幸福を得るのである。イスラームが始まったとき、ムスリムたちは不信仰者たちに迫害され、家を追われることもあったが、不信仰者たちが被った損害はそれより遥かに大きく、富や名声についても、ムスリムは不信仰者たちより遥かに多くを得^え、異邦人たちをも凌ぐほどであった。

そしてアッラーの使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）——を多神教徒たちがあらゆる手段を以て迫害しようとしたとき、アッラーは彼を庇護し、高め、守り、勝利を与えた。というのも、クライシュ族のどのような有力者であっても互いに害し辱め合うのをやめることができない状態にあったからだ。つまりどの有力者の中にも、自分に対して言い争い、敵対する^{ライバル}宿敵がいたのである。それがアッラーに従わない者の状況なのであった。

一方、預言者の従者たちがアビシニアに避難した際に、アビシニアの王は、彼

らの振舞いを賞賛し、最大限の敬意をもって厚遇したのであり、またマディーナに避難した者はより多くの尊敬と厚遇を受けた。

また現世で不運にさいなまれた者も、この世で信仰とその甘美、その歓びによって、苦悩は償われる。

そして、彼らに敵対した者には、その倍の痛苦と不運が襲い、永劫にその罪が償われることはない。彼らはその罪によって罰せられるのだから。また信仰者は信仰を問うことにより、彼らの信仰を純化し、犯した罪を償うことができる。

つまり、信仰者はアッラーのために行為するのであり、もし彼が不幸の中にあっても、アッラーが助け給うのであり、また、労力を費やしたなら、それはアッラーに捧げられ、その報いをアッラーに委ねるのである¹⁴。

信仰は、こころに甘く、その歓びは比類ない。

預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）はこう言われた。

「信仰の甘美^{あま}さをあじわった者は次の三つのことを見つける、アッラーとその使徒が他の何ものにもまして愛しく、アッラーのため以外には誰をも愛さず、アッラーが不信仰から救い出してくださった後でまた不信仰に戻ることを業火に身を投じられるように嫌うこと」。

これは『サヒーフ・ムスリム』にある¹⁵。

また『サヒーフ・ムスリム』にはこうある。

「誰であれ信仰をあじわった者は、アッラーを主と仰ぎ、イスラームを宗教として、ムハンマドを使徒として満ち足りるのである¹⁶」。

アッラーはかれの使徒に、始まりにおいても終わりにおいてもイスラームに入信しない者を悲しみ失望することを禁じられたのであり、したがって、彼らのことで心を痛み、彼らの敵に苦悩^{なや}む必要はないのだ。

またおおくの人々は、数多の罪によってイスラームの状況が改変されるのを見て、慌てふためき、疲弊し、不幸に遭った者のように泣き喚く。彼はそれを禁じられているというのに、だ。むしろ彼には、イスラームの教えにあって耐え忍び、信頼し、確信することが命じられているのだ。アッラーを畏れ、善行を行う者たちと共にアッラーを信仰し、篤信者には善い報いがあり、起こった不幸は人々の罪の結果であると耐え忍ばねばならない。真^{まこと}にアッラーの約束は真実なのであり、しからば自らの罪の赦しを請い、夜も朝もアッラーを讃えよ。

預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）が述べた「そしてまた始まりのような奇妙なもの＝少数派に戻るだろう」というのは二つのことを意味している。

第一に、[イスラームが] 始まりのときには奇妙なもの＝少数派であったものの、後に勝利したように、いかなる場所だろうと、時代だろうと、人々のあいだで奇妙なもの＝少数派に戻っても、後には勝利する（thumma yazhar）、ということ

なのだ。だから「始まりのような奇妙なもの＝少数派に戻るだろう」と言われたのだ。

それは奇妙なもの＝少数派として始まり、[誰にも]知られていなかったが、後に勝利し、[万人の]知るところとなったことと同じく、知る者がいない状況に戻っても、次に勝利し、知れわたる。つまり今日それを知る者が少ないのは、最初にそれを知る者が少なかったのと同じことなのだ。

そして[第二に]、来世にはわずかな者たちを除きムスリムは残らない。だがこれは、ダッジャール、ヤージュージュ、マージュージュが現れたあとの[最後の審判の]時であり、その後アッラーはすべての信徒の靈魂をとらえる風を遣わされ、そして蘇り、審判となる。

それ以前については、預言者(彼にアッラーの祝福と平安あれ)が、「私の共同体では、真理にある一団が絶えることはない。彼らと対立する者や裏切る者には、彼らを害することはできない。その時(最期の審判)に至るまで」と述べている。

このハディースは『^{サヒーハイン}両真正集』に収録されており¹⁷、また異なる文言でも伝えられている¹⁸。

誠実で信頼された方¹⁹が、彼の共同体には、みずからを保つことができる一団(taifah mumtani'ah)が絶えることなく栄え、無法者や偽善者の離反も彼らを害することはない、と伝えられた。だから最後の審判以前には、イスラームが地上のすべての場所で奇妙なもの＝少数派として辱めを受けたまま、ということはありませんのだ。

預言者(彼にアッラーの祝福と平安あれ)は、「始まりのような奇妙なもの＝少数派に戻る²⁰」と言われた。イスラームに入信したあと棄教するような背教者が出る時代には、その疎外^{グルバ}はいかに大きいことであろうか。至高者は言われた。

「汝らのなかで、みずからの宗教から背き去る者があらば、アッラーは何れかが愛で給い、また彼らもアッラーを愛し、信仰者には謙虚で、不信仰者たちには峻厳で、アッラーの道においてジハードし、批判者の中傷を恐れない民を興されるだろう²¹」。

つまり[背教者たちが]背き去った際には、これらの人々がそれを担うのだ。

このように、それは奇妙なものとして始まり、拡がるまで不断に強くなるのである。同じようにあらゆる場所と時代においてイスラームが奇妙なもの＝少数派となっても、いと高き崇高なるアッラーが支え給い勝利するのだ。ウマル・ブン・アブドゥルアズィーズが守護者^{ワリ}となったとき²²、多くの人々にとってイスラームは疎外^{タガッラバ}されており²³、葡萄酒が禁じられていることを知らない者さえあったが、アッラーは彼とともに疎外されていた(ghariban)イスラームを知らしめたのである。

また『アル＝スナン²⁴』には、

「アッラーはこの共同体に、百年毎に、彼らのためにその宗教を再興される者をお遣わしになる」とある²⁵。

再興は消滅のあとに起きるのであり、それこそがイスラームの疎外^{グルバ}なのである。

このハディースはイスラームの本質を知る者がすくないことを憂いそれに苛立つてはならないということをもスリムに教えている。また始まりのときにそうであったように、イスラームの教えに疑いを抱くことはない。

至高者は言われた。「もし汝が、われらが汝に啓示したものについて疑うなら、汝以前の啓典を読む者らに問え²⁶」。

こうしたアッラーの章句など、イスラームの正しさを明証する徴^{しるし}や証^{あかし}は多い。

そしてまた、イスラームが疎外^{タガッラバ}された時代の信徒にも、始まりのときに「信徒が」必要としていたのと同じような徴や証が必要なのである。

そのような者に「アッラーは」言われた。「アッラーのほかには誰が裁定者を望むというのか、かれこそ汝らに明白なものとして啓典を下されたおかたであるというのに、われらが啓典を授けた者らはそれが汝の主から真理と共に啓示されたものであることを知っている、ゆえに、疑う者たちとなってはならない。そして汝の主の御言葉は真実と公正さにおいて完成した、かれの御言葉を挿げ替える者はいないのだ、かれは全てを聴きよく知り給うおかた。もし汝が地上の大多数の者に従うなら、彼らは汝をアッラーの道から迷わせるであろう、真^{まこと}に彼らは憶測に従っているに過ぎず、彼らは嘘をついているに過ぎない²⁷」。

また至高者は言われた。「汝は、彼らの大半が聞き、あるいは理解すると思っ

ているのか、彼らは家畜の類に過ぎない、いや、彼らはさらに道に迷っている²⁸」。

疎外^{グルバ}はそのシャリーア（法、教え）の一部に生じることもあれば、一部の地域に生じることもある。多くの場所で人々がシャリーアに盲目となり、一人、また一人とそれを知る者がいなくなる、というまでに彼らのあいだで「イスラームは」奇妙なものとなるのだ。

それと同時に、アッラーとその使徒が説いたようにシャリーアを守るものに幸せはある。だから、それを宣揚し、命じ、それに反することを禁ずることは、能力と協力に応じるのである²⁹。

預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）は言われた。

「忌むべきことを目にした者はその手でそれを変えてみせよ、もしそれができなければ言葉で、もしそれもできないのなら心で。ただしそれは辛子種のような信仰というもの³⁰」。

人々のなかには、アッラーとその使徒、その信徒の約束に反して、現世と来世において災難に遭う者がいるのではないか、と思われるかもしれないが、それは

ウフドの戦没のように、人が犯した罪と不十分な^{イスラーム}帰依に起因するのだ。

それ以外については、至高者が言われている。「真にわれらは、われらの使徒たちと信仰する者らを現世において、また証人たちが立つ日に必ずや授けよう^{まこと}」³¹。

また至高者は言われた。

「確かにわれらの言葉は、われらの下僕である使徒たちにすでに遣わした^{まこと}。真に彼ら、彼こそが援助される者である、と。そしてわれらの軍勢、それこそが勝利者である、と³²」。

至高なるアッラーの、預言者たち、彼らに従った者たち、その彼らへの援助、救済、その敵の滅亡などについての物語が教訓なのだ。アッラーはすべて知っておられる。

またもし、祝福に満ちた至高者が述べた。「汝らのうちでその教えを棄てる者には、アッラーは自ら愛で賜い、彼らもアッラーを愛するような民を興すだろう³³」との御言葉は第一世代に対する言葉であり、至高者が言われているように、「アッラーは汝らのうち、信仰し善行をなした者に、彼ら以前の者に地を継がせたように、必ずやこの地で後を継がせると約束された³⁴」。

との宣明について預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）は、彼らはアラブの背教者たちが背き去ったときにイスラームに入信したイエメンの民のことであるということを示している。これは最後には信徒が残らないということがそれを示しているのではないか。

と言うのならば、祝福に満ちた至高なるアッラーが彼に述べた「信仰する者よ」との御言葉も、このような類のほかの御言葉と同じく、クルアーンの宣教が届いたところのすべての信仰者たちに告げられているのだ [と反論できよう]。至高者が言われたように、「信仰する者らよ、もし汝らが礼拝に立ったときには³⁵」との箴言や、至高者が言われた「アッラーは信仰する者へ約束した」、

[というように] どちらもかつては生じ、——偉大なるアッラーが言われたように、再び生じるのだ。つまりイスラームから背き去る集団があれば、アッラーが愛で賜う一族があらわれ、彼らも彼の^{アッラー}ためにジハードする。そう、彼らの一団こそが復活の時に至るまで神佑を賜るのである³⁶。

このことは不信仰者との交友の禁止の文脈で言われているのは明らかである。ゆえに至高者は言われた。「信仰する者らよ、ユダヤ教徒やキリスト教徒を^{とも}後見としてはならない、彼らは互いに^{なかま}後見である、汝らの中で彼らを後見とする者は彼らの内にある、真に^{まこと}アッラーは不正な民を導かれない。そして汝らは、心に病を宿す者らが彼ら [ユダヤ、キリスト教徒] のもとに急ぎ、われわれは^{とも}轉變に見

舞われるのを恐れている、と言うのを見る、アッラーは勝利あるいは彼の御許からの命をもたらされる、そのとき彼らは心中に隠したものを悔やむ者となるであろう」そして、「信仰する者らよ、汝らの中で自らの宗教から背き去る者があれば、アッラーはいずれかれが愛し給い、また彼らもアッラーを愛するような民を興されよう³⁷」。

ユダヤ教徒やキリスト教徒との交友を禁じられている者は、背教の節で言われている者であり、それが共同体のすべての世代で起きることは知られている。

そして彼がその不信仰者との交友を禁じられ、[ここで述べられているところの]彼ら不信仰者を後見とする者は彼らの後見であるということ进行明らかにされたとき、彼らを後見としイスラームの教えから離教する者には、イスラームを一切損ねることはできないということ进行明らかにされたのだ。

むしろアッラーはご自身が愛で賜いまた彼らも彼を愛し、不信仰者ではなく信仰者を盟友とし、アッラーの道にジハードし、批判者たちを恐れぬ一族を興されるのだ。それは始まりのときに言われたように、「彼らがそれを信じないなら、われらは不信仰者とならない民にそれを託そう³⁸」。

このようなイスラームに入信しなかった者たち、入信したあとに離教した者たちは、イスラームを一切損ねることができない。また、アッラーはかれの預言者が伝えたことを信ずる者を興し、復活の時に至るまで、その宗教を助け給うのである。

確かにイエメンの民は、かつて背教者が離教したとき、アッラーが言及された対象であるが、この節は彼らに限ったものではなく、またハディースにも彼らだけを特定させるものはない。アッラーはまた、イエメンの民以外にもペルシアの子ら等を[興されると]告げられているが³⁹、その盟約は彼らだけに限られているものではない。

だが至高者は言われた。「信仰する者らよ、汝らはどうしたというのか、アッラーの道において出征せよ、と言われるとなにゆえ地に伏してしまうのか。来世ではなく、現世に満足しているのか。現世の愉しみなど来世に比べればわずかなものに過ぎない。もし汝らが出征しないなら、アッラーは痛苦の懲罰で汝らを罰し、汝ら以外の民と代え、汝らは彼（その民）をわずかにも害することはない。アッラーこそすべての者に対して全能なるおかた⁴⁰」。

この宣明はまた、すべての世代を対象として語られているのであり、そこで命じられたジハードから逃れる者は罰せられ、ジハードを遂行する者と取替えられると述べられているのであるが、これこそが起きることなのだ。

またそれは他の節における御言葉にあるように、「見よ、汝らはアッラーの道において私財を費やすよう呼びかけられているのである。それでも汝らが背き去っ

たなら、かれは汝ら以外の民を代わりになし、彼らは汝らのようにはならないであろう⁴¹」。

ゆえに至高なるアッラーは、自ら赴いてのジハードであれ、アッラーのための支出⁴²であれ、[ジハードを]避ける者を取り替えられる。

これが臆病な者、吝嗇な者の状況であり、アッラーは彼らを、イスラームを守り、そのために支出する者に取り替えられるのだ。イスラームの始まりの状態とはどういうものであったか？ アッラーは、それから離反する者に代えて、ご自身で愛で賜いました彼らもアッラーを愛し、信仰者たちには謙虚で不信者たちには峻厳で、アッラーのためにジハードし、批判者の中傷を恐れない民を興されたのだ。

そしてそれ[その者たち]は、^{イルム}知、^{イバーダ}崇拜、^{キタール}戦闘、^{マール}富[を持つ]の民のなかに存在するのであり、この四つの集団と共に復活の時に至るまでジハードし神佑を賜う信仰者があったが、そのなかには背教者や、ジハードや支出を拒否する者もあった。

だから至高者はこう言われたのだ。「アッラーは汝らのなかで信仰し、善行を成す者たちに、地を継がせると約束された⁴³」。

それゆえこの約束はこの性質を有する者すべてにあてはまるのであり、先達たちがこうしたものを有していたからこそ、アッラーは約束通り彼らに成功を与えられ、また彼ら以後にも信仰と善行において最も完全である者がその継承（＝繁栄）においても完璧であったのだが、その点において欠陥があり無秩序な者は、その繁栄においても不十分で欠陥があったのである。だがそれはその行為への報いだからであり、そうした行為を行った者は報いを受けるのである。

しかしながら、どの世代も初期の世代のような状態を維持しなかった。

[預言者は]言われた（彼にアッラーの祝福と平安あれ）。

「最善の世代はわたしが遣わされた世代であり、次いでそれに継ぐ世代であり、次いでそれに継ぐ世代である」。

だがしかし、いくつかの世代の民は、一部の地域でいくらかのムスリムに起こったように、また、すべての時代でそうであったように、続いてゆく。

これに関して彼（彼にアッラーの祝福と平安あれ）はこう言った。

「アッラーはすべての信徒の魂を掴む風を遣わされる⁴⁴」。

これは離教ではなく信徒の死が言われているのであり、なぜなら彼は、もしすべての信仰者が死すればアッラーはその場所を他者に代えられる、とは言われてないからだ。[アッラーは]ただ^{かれら}信徒の一部が宗教を背き去るとき、そう約束されたのである。

それゆえ彼は、この共同体が過ちにおいて合意しないこと、すべての信徒が離

教することがないこと、そして最後の審判に至るときに顕在化する信徒たちの残存者を離教させることはないのである。ゆえに、もしすべての信徒が死するのなら、その時（最後の審判）に至るのだ。

これは知^{イルム}についてのハディースにある通りである。

「真^{まこと}にアッラーは人々から知識を奪って取りあげることはない。そうではなく、^{アッラー ウラマー}彼は学者を取り上げることで知識を取り上げられるのだ。学者が残らなければ、人々は愚かな指導者を戴き、彼らに質問し、彼らが知識なく^{ファトワー}法裁定を下すことで人々が道に迷い留まる、といったことはないのだから」。

この真正集のハディースは、アブドゥッラー・ビン・アムルが預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）から伝えられたハディースとして有名なものである⁴⁵。

だが、イブン・マスウードと彼の別のハディースによると [預言者は]、
「クルアーンに当て嵌めるが、アル＝ムスハフ⁴⁶の一節も保持できず、胸のなかに一節も残らないだろう」と言われたが、
これは矛盾している。

と言うならば、そのようなことではない、と言おう。なぜなら知識を取り上げることは、クルアーンを取り上げることは違うからだ。[それは次の]異なるハディースが明証している。

「これが知識を取り上げるときだ」。

つまりある援助者^{アンサール}が、

「われわれがクルアーンを誦み、われわれの女や子供たちにそれを誦ませているというのに、どうしてそれが取り上げられるのでしょうか？」

と言ったとき、[預言者は] こう言われたのだ。「あなたは母親泣かせだな。あなたのことは、マディーナの人々の中でも最も深い理解の持ち主の一人だと思っていたのに。一体、ユダヤ教徒やキリスト教徒に^{トーラー}律法や^{インジール}福音書がないとでもいうのか。何が彼らに足りなかったというのか？」

すなわち、ただ書物^{クルアーン}が保持されているというだけでは、知識が必要とされないという帰結を導く。とりわけ偽善者も信仰者もクルアーンを読み、また、書物を理解しない無知蒙昧な者もそれを読む以上そうなのである。それを望む者を除いて。

ハサン・アル＝バスリーもこう言っている。

「知識には二種類ある。心のなかにある知識と、舌の上にある知識である。心の知識とは有益な知識のことであり、舌の知識とはアッラーの下僕に対する証明のことである」。

それゆえ、アッラーが学者を取り上げられれば、書物からであれ記憶によってであれ、知識なくクルアーンを読む人間だけが残るのである。

あるいは、『両真正集』に収録されたフザイファのハディースによると、[預言者は] 人々に誠実さの篡奪について、

「人が一眠りすると彼の心から誠実さ^{アマーナ}⁴⁷が取り上げられる。その影響は腫れのように残る。それから、また一眠りすると彼の心から誠実さが取り上げられる。その影響は水脹れのように残る。腫れ上がって見えても、実は中には何もないのだ⁴⁸」

と言っているではないか。

と言うならば、言おう。誠実さ^{アマーナ}と信仰の篡奪は、知識の篡奪とは違う。人間は知識を欠いていても信仰を授かることもあるが、たとえば子牛を見た時のイスラエル人の信仰のように、この信仰は胸から取り上げられるのである。だが信仰と共に知識を授かった者は、それが胸から取り上げられることはない。たとえばそれは、クルアーンだけ、あるいは信仰だけを授かった者とは異なり、イスラームを裏切ることはないのだ。こうしたことが起こるのである。

そう、これこそが現実なのだ。

しかし、われわれが目にする背教者の多くは、知識と信仰なくクルアーンをもっている者、あるいは知識とクルアーンなく信仰をもっている者であり、クルアーンと信仰を授かった者は、知識を手にし、それが彼の胸から取り上げられることはないのだ。アッラーはすべてご存知であられる⁴⁹。

第二部：解題

「テキストを書くとは、テキストである自らの身体にそれを刺青することである⁵⁰」。そうであるならば、テキストを書く者もまたテキストの一部だということになる。ここに訳出したテキストの著者イブン・タイミーヤの半生もまた、このテキストに滲み出している。ゆえに彼自身についてその半生をここに簡潔に示しておく必要があるだろう。

タキーユッディーン・アハマド・イブン・タイミーヤ⁵¹は、1263年にシリア北部のハッラーンでハンバル学派の学者の家系に生まれた。タイミーヤの父、祖父、叔父はみな高名なハンバル学派の学者であった⁵²。

イブン・タイミーヤが生を授かった十三世紀中葉は、「モンゴルの世紀 (Pax Mongolica)」と言われ、イスラーム帝国の領土がモンゴル帝国により大いに侵

食された時代であり、その猛攻の結果、モンゴル帝国は1258年にバグダードを征服した。十三世紀当時において、アッバース朝カリフを戴くバグダードは、かつては極めた栄華を失ってはいたたもののイスラーム世界にとっての象徴的都市であり、モンゴル帝国によるバグダード征服は人々に極めて深刻に受け止められたという⁵³。しかし、それでもモンゴルの西進はとどまることなく、マムルーク朝治下のダマスカスを陥落させたほどだった。イブン・タイミーヤはイスラーム共同体がこうした対外的脅威に直面した時代に生まれ、自身もモンゴル帝国の脅威から、1268年に家族とともにハッラーンの生家を追われている⁵⁴。

ハッラーンから家族とともにダマスカスに移り住んだイブン・タイミーヤは、幼少期から学問の才覚を発揮し、齢十七にして法的諸問題に対し専門的な見解^{フアトワー}を提出できるほどであった。その後1284年に父が死去すると、後を継いでスッカリーヤ^{マドラサ}学院のハンバル派法学教授となり、翌年にはダマスカス最古のウマイヤ・モスクでクルアーン^{タフスィール}註釈=釈義の講義を受け持った⁵⁵。イブン・タイミーヤは三十歳を前にしてすでに世に認められる高名な学者となっていたのである⁵⁶。しかし、厳格で知られるハンバル法学派で神学的にはハディースの徒⁵⁷であるイブン・タイミーヤは、論敵に対する歯に衣着せぬ物言いかから多くの敵を作り、政敵に囚られては何度も投獄され、最期には以前に布告した^{フアトワー}が原因で時のスルターンに拘留され、1328年に拘留先のダマスカス城で獄中死している⁵⁸。

そのような最期を迎えたタイミーヤであるが、彼が生きた時代は、イスラーム共同体がモンゴルという強大な対外的脅威に曝される一方で、タイミーヤに言わせると、イスラームの内部にも深刻な「疎外」が進んだ時代でもあった⁵⁹。それは第一に、イスラーム帝国の衰退と時を同じくして訪れた「イスラーム学」の知的停滞であり、第二には神秘主義^{スーフィズム}の発展と普及に依る⁶⁰。

ハンバル学派を除くイスラーム学的見解では、十世紀初頭に「イジュティハードの門が閉じられた (insidād bāb al-ijtihād)」とされる⁶¹。イジュティハードとは、「ジハード」と同じく「努力」を意味する三語根「J - H - D」の変化形（第Ⅷ形）であり、語義的には「最善を尽くすこと⁶²」を指すが、法学の用法では「聖法の具体的法源から法判断を見出すために努力すること⁶³」と定義される「学的努力」のことである。すなわち「イジュティハードの門が閉じた」とは、イスラームの法解釈・法規範は先達たちによって完成したのであり新たな法判断を創出する余地はない、との立場を表す⁶⁴。しかしその結果、法学上の諸問題に対して新しい法解釈を打ち出す余白はなくなり、ただ先達たちの学説を支持するだけの消極的な学的態度 (taqlid、追従) からイスラーム諸学の発展は停滞することとなった⁶⁵。イブン・タイミーヤはこの「イジュティハードの門は閉じた」という命題を批判し、イジュティハードの重要性を説いた⁶⁶。また他方で、神秘主義は十一、十二

世紀に発展し、その勢いは十三世紀に入りさらに加速していた。この時期の代表的な論者にイブン・アラビー（1240年没）やジャラルッディーン・ルーミー（1270年没）らがあり、タイミーヤ自身も神秘主義哲学の書物に通暁していたとされる⁶⁷。ただし、タイミーヤは、イブン・アラビーらの神秘主義哲学や、神秘主義教団、聖者廟参詣を批判している⁶⁸。この頃の神秘家と民衆のなかには、蛇を儀礼に用いたり「聖なる石」を信仰する集団もあり、タイミーヤの批判はこうした行為に注がれた⁶⁹。

イブン・タイミーヤはモンゴルという外的脅威に対してジハードを呼びかけただけでなく、前述したようなイスラームの内的脅威、退廃に対しても生涯、警鐘を鳴らし続けた。ダマスカス市民の生命と財産のためにモンゴル軍の最高司令官との交渉に赴き、捕虜解放に奔走しただけでなく実際の戦場で剣を取って馬を駆り、イブン・アラビーの「存在一性論」を汎神論であると厳しく論駁しては論敵に「神人同型論者」と罵られ、当時流行していた聖者崇拜を激しく批判し権力者の恨みを買っては投獄され、神秘主義者と思弁的な論争を繰り広げていたかと思うと聖石信仰に激怒して弟子とともにその石を叩き割りに奔走し、定説に挑んでは法学者を論破し挙句の果てにはハンバル学派の大法官からも公式見解と異なるファトワーの布告を控えるようなだめられ、それでも再三のファトワー禁止令を破っては捕われ、ようやく出獄した後にも軟禁前のファトワーを曲解した論敵に嵌められ、遂には書物も筆具も奪われた薄明のなか、獄中で最期を迎えたのである⁷⁰。

そのような彼は生前、真理の徒はどこにいますか尋ねられてこう答えている。「(すでに死去して) 地下にいるか、あるいは牢獄に、あるいは戦地に⁷¹」。

これが、イブン・タイミーヤの、生涯を賭した闘いの記録である。彼は生涯を通して、本テキストに記された、「奇妙な者=少数派」であり続けたといえよう。

本論考の解説

次に、本論考の簡単な解説をここに呈示しておきたい。このテキストは明瞭に書かれているため、その解題をここに書きつけることは蛇足に思われるが、タイミーヤが本稿で開示した論旨を要約し、「イスラーム国」の問題系に引きつけることで解題としたい。

まず、本稿は「イスラームは奇妙なものとして始まった」というハディースを主旋律に、次の四つの事柄が副旋律として語られる。それを(一) 奇妙な者たち、(二) 終末での勝利、(三) ジハード、(四) 知識、と区分し、以下順に見ていくことにする。

一、奇妙な者たちについて

預言者ムハンマドは「イスラームは奇妙なものとして始まった。そしてそれはまた始まりのような奇妙なものに戻るだろう。奇妙な者たちに幸せあれ」という言明を遺している。ここで言及されている「始まり」とは、預言者とその従者 (salaf) がマッカで宣教を始めた痛苦に満ちた最初の十三年のマッカ期を指している。その後——歴史が明証しているとおりに——預言者の共同体はマディーナに移住 (hijrah) し、後に興るイスラーム文明の栄華を準備した。

だが先述しておいたように、イブン・タイミーヤが生を授かったときには、モンゴル帝国による侵略が眼前にまで迫っており、真のイスラームはすでに「奇妙なもの」として疎外される状況にあった。

こうしたイスラームの状況では、信仰者が多数派となった背教者や不信仰者から奇妙な者たちと見放されるほどであった。この状況は、「やがて奇妙なものに戻るだろう」という先のハディースが明示していた状況と通底している。だがしかし、タイミーヤによると、いかなる困難にあっても「信仰を掴み離さない限り」この者たちには幸せがあり、最後にはイスラームが勝利する。この困難な時代にあっても信仰を掴み離さない者が「奇妙な者たち」である。イスラームの疎外が進む時代において、信仰者は少数派であり余所者であり奇妙な者たちである。そのような者たちを周囲は嘲笑い罵るだろう。信仰者たちは迫害され、やがて孤立し、みずからも憂き目に遭うだろう。しかしそれでも耐え忍び、「夜も朝もアッラーの栄光を讃えよ」。そうすれば、現世でも来世でもより多くの幸せがあり、不信仰者には倍の痛苦が待っているのだ。そうタイミーヤは克明に語っている。この導入部で、「グラバー」であることが正しい理由が一挙に与えられている。

二、終末における勝利について

次いで、タイミーヤの註解により、「始まりのような奇妙なもの=少数派に戻る」というハディースの二つの意味が明かされる。それは第一に、イスラームの勝利を示している。預言者は少数で始まった共同体を率いて大群に勝利した。周囲からは当初、奇異な小集団として見放されていたのにもかかわらず。ゆえに、「始まりのような奇妙なもの=少数派に戻る」という言明は、イスラームの疎外が進んだとしても、ふたたび奇妙なものに戻ったとしても、最後には勝利するということを約束している。そして第二に、終末についての証明が与えられている。曰く、「来世にはわずかな者たちを除きムスリムは残らない」。最後の審判の前には多くの離教者が出る。しかし背教者に替わって新しい民が共同体を担い、イスラームは少数派となりながらも、アッラーの支えを得て勝利し、広まる。だから最後の審判の前に、イスラームが奇妙なもの=少数派として辱めを受けたまま終わることはない。「始めのように戻る（そして勝利する）」という言葉がそれを明証し

ているのだから——。つまりタイミーヤは「始まり・終わる」という時間軸を、「イスラームの初期」から「最後の審判」までの期間で捉えているのであり、聖典で明示されたように「始まり」と「終わり」にイスラームは勝利するのである。タイミーヤはこのハディースを、勝利が約束された戦いをグラバーとして忍耐せよ、と読解するのだ。

三、ジハードについて

しかし、ただ忍耐するのではアッラーとの盟約を守ったことにはならない。そこでタイミーヤはこのハディースを「ジハードへの呼びかけ」に差し向ける。イスラームは奇妙なものとして終わらない。アッラーはジハードに背を向ける集団があれば、新しい集団を興し、「それらの者こそ最後の審判の日に至るまで、神佑を賜る集団」となる。そしてこの文脈で、ジハードがムスリムの義務であることが再三にわたって強調されることになる。尻込みするな、ジハードであれアッラーの道への支出であれ、ジハードに邁進せよ。イスラームの始まりの時代を思い起こせ。「アッラーは必ずや信徒の中に最後の審判の到来に至るまで勝利者である者を残しておかずにはいられないのである」。このように、イスラームの疎外が進行する乱世にあって、タイミーヤは雄弁にジハードを呼びかける。この論脈において、信仰とジハードは合流を果たす。

四、知識について

だが、とタイミーヤは投げかける。そして、「知識とは」と間断なく言葉を継いでいく。タイミーヤによると、知識はクルアーンが保持されているだけでは不十分である。なぜなら、知識には、「心の中の知識」と「舌の上の知識」のふたつがあり、「心の中の知識」を失えば、知識なくクルアーンを読む者だけが残ることになる。クルアーンを知識なく読むことは、イスラームを換骨奪胎させることであり、その結果、法判断の誤りを引き起こすこととなる。「人々は愚かな指導者を戴き、彼らに質問し、彼らが知識なくファトワーを下すことで、人々は道に迷い留まる」というように。また、「人は知識がなくても信仰を授かることもあるが、(...)この信仰は胸から取り上げられ」てしまう。しかし、「信仰と共に知識を授かった者は、それが胸から取り上げられることはない」。つまり、「われわれが目にする背教のおおくは、知識、信仰、クルアーンのいずれかが欠けている者であり、このすべてを授かったものは、決して離教することはないのである」。この節を以てイブン・タイミーヤは筆を擱く。

本論考では、こうした四つの事柄が本論考の中核を担っていると言えよう。

本論考の重要性と現代的意義

中世イスラーム世界で書かれたイブン・タイミーヤの本論考は現代においても

極めて重要な意味をもつ。ここで示される「奇妙な者たち」という語が、本論考の最重要概念であるばかりか、イスラーム国等のサラフ・ジハード主義思想を読解する上での鍵概念となるからだ。

理由は二つある。第一に、テキストの著者イブン・タイミーヤが、サラフ・ジハード主義者たちに準拠される象徴的な書き手であることがあげられる。ここでは一言述べるに留めるが、イブン・タイミーヤの思想は、アル＝カーイダやイスラーム国等にとってその運動を支える思想的理論的支柱であり、その点においても本論考を呈示することの意義はことさら大きいと思われる。また、イスラーム国が国際社会に衝撃をもって受け止められて以来、イスラーム国との関連でイブン・タイミーヤに言及する論説もあったが、ここに訳出したテキストが取り上げられたことは未だない。先行する研究がカバーできていない事柄を補完するといった意味でも本論考は重要であろう。そして第二に、いわゆる過激派と呼ばれるジハード主義組織がもちいる「奇妙な者たち＝グラバー」という概念の射程が、本テキストの読解によって明らかとなるからである。そして、この概念を以て、イスラームに立脚した、いわゆるテロリストたちの思想の暗部を浮かび上がらせることができ、また本テキストの読解を通じて、如何に彼らがイブン・タイミーヤを誤読しているかという限界をも明らかにすることができるからである。

われわれはテロの時代に突入した、と言われて久しい。確かにそうだ。ここ数年だけでも幾度となくテロの攻撃に曝され⁷²、幾人もの人々がテロの犠牲となったのだから。治安維持の名目で監視と諜報は強化され、国によってはそのリストは数万を超える。われわれはいまや、いつ、どこで、何が起きても不思議ではない、そうした不確実性のなかを生きている。そして、そうした恐怖を撒き散らしている存在の中心に「イスラーム国」を名乗る集団が位置している。

しかし、イスラーム国は当初、戦略的拠点であるイラクとシリアの戦闘地域以外で無差別にテロ攻撃を実施してはいなかった。無論のこと、この段階で欧州やアジア諸国等にネットワークや拠点が形成されていなかったことは第一の理由だろう。しかし他方で、イスラーム国は有志連合による空爆開始後に、人質の斬首や欧米等でのテロ攻撃の呼びかけを開始したという事実を忘れてはなるまい。そう、空爆による攻撃への反撃として、侵略に対する抵抗として、「ジハード（彼らにとっては人質殺害やテロ呼びかけと同義）」が行われたのだ。

これは彼らからするとイスラームの教義に準拠している。侵略に対する抵抗はイスラーム法 (fiqh) で信徒の義務と定められているし、そのための呼びかけはカリフの大権である。ゆえに、カリフ・イブラヒーム（指導者アブー・バクル・バグダーディー）を戴くイスラーム国は、カリフの宣告としてみずからの呼びかけを正当化することができるのである。すくなくとも彼らの理路においては。

しかし、そうだととしても、何故このような無差別テロをイスラームの名の下で起こすことができるのだろうか？ どのような思想がそれを可能にしているのだろうか。テロの実行犯たちが無辜の市民を一方的に撃ち殺し爆殺するとき、彼らはそれを如何にして正当化しうるのだろうか？ 圧倒的多数のムスリムたちから「あれはイスラームではなくただのテロ組織であり、彼らはムスリムではない」と断罪されてもなお、彼ら彼女らが「イスラーム国」を名乗り、みずからの正統性を確信できるのは何故なのだろうか？

こうした問いに対する答えを、われわれは「奇妙な者たち＝グラバー」という思想に見出すことができる。本論考で示された「奇妙な者たち」という概念は、イスラーム国等のサラフ・ジハード主義思想を読解する上での鍵概念となる。

「奇妙な者たち」のイスラーム国——グラバーの倒錯

イスラーム国の広報にもたびたび登場するように、彼ら彼女らは自分たちを「グラバー」と自認している⁷³。たしかに、イスラーム国がその理想を体現する共同体であるとするならば、この認識は正しいのかもしれない。イスラーム法的に正統な統治者たるカリフ位を再興し、その信徒たちの長の呼びかけに従って移住(hijrah)を成し遂げ、共同体の侵略にたいして命と財産を賭したジハードに打って出ているのだから。無論、イスラーム国(the Islamic State)において、この理想は破られている。だが、このことについて語るのは、本解題の課題を遙かに越えているため、ここでは一言添えておくに留めよう。

そう、イスラーム国の構成員からすれば、イスラームが疎外される現代において、ジハードに出征せず、イスラーム的公正とは程遠い世俗国家の走狗と成り果て、カリフの命に従うどころかイスラーム国を敵対視することは端的に言って「背教」なのだ。これらは、すべてイスラーム国の言説のなかに見いだせる。イスラーム国を批判する者のなかには、一日五回の礼拝を守らず⁷⁴、ラマダーン期間中に断食をせず、人によっては法的に「禁」とされている飲酒や姦淫を犯す者さえあるだろう。そうした「不信仰者」からの批判——イスラーム国はイスラームではなく彼らはムスリムではなくテロリストである、という断罪——は、むしろシャリーアを厳しく守るイスラーム国のイスラーム的な正しさを逆説的に明証してしまうことになる。すなわち、多数派がイスラーム国を「背教者」と言えばいうほど、少数派たるイスラーム国はみずからが「グラバー」であることの確信を強めていく構造にあるのである。だから、イスラーム国にとって「グラバー＝奇妙な者たち」というタームは極めて重要な意味をもつのであり、イブン・タイミーヤの本論考(と数多の仕事)はその理論的支柱となったのだ。

このイスラーム国の倒錯した論理を、私は「グラバーの倒錯」と呼びたい。「グ

「ラバーの倒錯」とは、大多数のムスリムが少数派たるサラフ・ジハード主義者を批判すれば批判するほど、彼らはみずからの正しさを確信する、という逆説的な構造のことである。この点を指摘することに代えて、訳者解題としたい。

* * *

このハディース註解論考が本邦で紹介されるのは本稿が初めてではない。イブン・タイミーヤがものした本論考は、1988年に中田考により註釈付きで邦訳され、日本サウディアラビア協会から出版されている⁷⁵。しかし、現今の「イスラーム国」に代表されるサラフ・ジハード主義思想・政治運動の根底に流れる思想を理解するためにも、本テキストを新訳し、現在の文脈に沿って読解することは必要と考え、拙訳に着手するに至った。訳出にあたって、底本の原註を不要と思われるものを除きすべて訳出し、改行や体裁も可能な限り原文に近づけた。また拙訳でも逐語的に翻訳したが、原文のもつ語感や語彙の多義性をそのままに厚く補足した中田訳に対し、拙訳では読みやすさとわかりやすさを重視して訳語を選定し、補足は最小限にとどめた。

イブン・タイミーヤはイスラーム国等のサラフ・ジハード主義組織から準拠される象徴的な書き手である⁷⁶。しかし、本論を読めば明らかのように、彼は知識と信仰の双方が等しく重要であると述べる。つまり、クルアーンやハディースを裁断して過激とも取れる一節を抜き出し、自らに都合のよい解釈を施して自己正当化を図る「インスタント・サラフィー⁷⁷」こそ、イブン・タイミーヤが批判している者の姿なのである。イスラーム学を修めず、過激思想を拗らせてサラフ主義者と化した有象無象は、タイミーヤのテキストも、その一部のみを切り取って準拠した気になっているに過ぎない。確かにイブン・タイミーヤはジハードを説いた。しかし、「不信仰者の地」と名指す諸外国でテロを起こし、それをジハードと正当化するイスラーム国の振る舞いは、タイミーヤの論旨をここまで追ってきたわれわれからすれば、誤りであることは明らかだ。しかし、彼らから見て不公正かつ共同体が「疎外」される状況こそが、イスラーム国のような思想の台頭を準備したということを見落としてはならない。これが、イスラーム国が突きつけた課題であることに疑いはないように思える。こうした点を確認する上でも、本論考のような簡潔かつ明瞭なテキストの全体を呈示することが重要であると訳者は考える。また、いわゆる過激主義の背後にある思想を正しく理解することは、昨今の安全保障上の課題でもある。こうした文献紹介の必要性を提起し、拙稿がその一助になると信ずる。

謝辞

翻訳にあたって、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科の山本直輝氏と同志社大学の中田考氏に訳文に関して有益な助言いただいた。両氏にはここに記して感謝したい。このテキストを紹介してもらい一緒に訳読していただいた山本氏と、訳文のすべてに目を通していただき、訳文のみならず翻訳全般やイスラーム学に関して多くの助言、示唆をいただいた中田氏に筆者は多くを負っている。

また、同志社大学のイヤース・サリーム氏には原文を翻訳する際にさまざまな質問に答えていただいた。重ねて謝意を表したい。しかし、拙訳に誤植や誤訳があるならば責任は訳者に帰されるべきである。

訳註

この訳稿はサリーム・イブン・イード・アル＝ヒラーリーが編纂した『奇妙なものや奇妙な者たち』という文献を翻訳の底本としている。本書には、奇妙なものや奇妙な者たち、あるいは奇妙さについて書かれた三人（イブン・タイミーヤ、イブン・カイイム、シャーティビー）のテキストが収録されている。このグルバ（*Ghurba*）、ガリーブ（*Gharīb*）と、そしてグラバー（*Ghurabā*）という語は、共通するアラビア語の語根「G - R - B」からの派生型であり、その原型動詞「ガラバ」とは本来発つ、遠くへ行く、ひいては不在を意味する。そこから派生してくるグルバの意味は、疎外、離別、離反、ないし孤独であり、鬱屈や侘しさという意味もある。

他方、ハディースで触れられている「奇妙なもの」という訳語をあてておいたガリーブという形容詞は、英語で「Strange」にはほぼ対応するものであり、行為者名詞の複数形グラバーは英語で「Strangers」と翻訳されることが多い。この語句には、部外者、余所者、外国人、異邦人、侵入者という意味とともに強い「疎外された者」という含意がある。中田考はこの語を「少数派」と翻訳している（中田1988）。これを鑑みて拙訳ではガリーブについて「奇妙なもの＝少数派」という訳語を採用し、グラバーは「奇妙な者たち＝少数派」と訳した。

註

第一部：翻訳

- 1 イブン・タイミーヤ『ファトワー集成 (*Majmū'ah al-Fatāwā*)』9巻166－173頁。
- 2 原註：これは特定多数の者たちが伝えている（*tawātir*）ハディースである。
- 3 クルアーン3：85.
- 4 ここで「至高者」と訳しておいた語の原文「*ta'ālā*」とは本来「至高なる」という意味の形容詞であり、主語である「アッラー」が省略されている。他方、この形容詞「*ta'ālā*」に定冠詞を付すと「*al-ta'ālā*」となるが、これは「神の99の美名 (*Asma' Allah al-Husnā*)」のひとつでアッラーのことを指す。この場合「至高者」と訳される。したがって、定冠詞がない形容詞の「*ta'ālā*」を「至高者」と訳すことは訳語の正確性に欠けるのだが、毎回主語を補って「至高なるアッラー」と訳すと訳文が煩雑になるため、本稿では「*ta'ālā*」を最も簡潔と思われる「至高者」と訳した。以下、「至高者」の語はアッラーを意味する。
- 5 クルアーン3：19.
- 6 クルアーン3：102.
- 7 クルアーン2：130-132.
- 8 原註：ブハーリー（イブン・ハジャル・アル＝アスカラーニーによるブハーリーの註解書『真正ブハーリーの解釈における創造者の勝利 (*Fath al-Bārī bisharḥ Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*)』：477－478、6巻)、ムスリム（アブー・ザカリーヤ・ヤフヤー・ブン・シャルフ・アル＝ナワウィーによるムスリムの註解書：119、15巻）やその文脈で証明されたように、アブー・フライラ（彼にアッラーのご満悦あれ）によると、アッラーの使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）は言われた。
「私はマルヤムの子イーサーに古今もっとも近い者である」。
彼らは言った。「アッラーの使徒よ、どのようにしてでしょうか？」
使徒は言った。「預言者たちは、母は違えどみな兄弟である。彼らの母は異なるが、宗教は一つである。われわれ（イーサーとムハンマド）のあいだに預言者はいない」。
- 9 クルアーン13：29.
- 10 クルアーン8：64.
- 11 クルアーン7：196.

- 12 クルアーン 39 : 36.
- 13 クルアーン 65 : 2 - 3.
- 14 原註：次の私の^{リクニヤ}論著を見よ 『聖クルアーンの光と真正スンナにおける信仰の甘美さ (Hlāwah al-īmān fī dawī' al-Qurān al-karīm wa al-sunnah al-ṣahīhah)』
- 15 原註：ブハーリー (ファトフ：60、1巻)、ムスリム (ナワウィー：13 - 14、2巻) 収録の、アナス・ビン・マーリクによるハディース。
- 16 原註：ムスリム (ナワウィー：2、2巻) 収録の、アル=アッバス・ビン・アブドゥルムッタリブ (彼にアッラーのご満悦あれ) によるハディース。
- 17 原註：このハディースは『両真正集』に収録されている：
ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーン：ブハーリー (ファトフ：632、6巻：442、14巻)、ムスリム (ナワウィー：65 - 66、13巻)
アル=ムギーラ・ビン・シュクバ：ブハーリー (ファトフ：632、6巻：293, 442、13巻)、ムスリム (ナワウィー：65 - 66、13巻)
- 18 原註：これは特定多数の者たちによって伝えられている (tawātir)。またすでにそのことは、豊穡なる彼の著書『地獄の仲間たちとは違って正しい道に従うことは義務である (Iqtidā' al-Ṣirāt al-Mustaḳīm Mukhālafah Ashāb al-Jahim)』(6頁) で宣言されており、それはムハンマド・ブン・ジャアフル・カッターニーの著書『複数の伝承経路から伝わる散在的なハディースの整理 (Naẓm al-Mutanāthir min al-Hadīth al-Mutanātir)』(93頁) が明らかにしている。
- 19 預言者
- 20 原註：註1で説明したハディースの一部である。
- 21 クルアーン 5 : 54.
- 22 ウマル・ブン・アブドゥルズィーズ (682 - 720) は、ウマイヤ朝時代の第八代カリフ (在位 717 - 720) であり、二代目正統カリフのウマル・イブン・ハッターブの曾孫にあたる。
- 23 tagharraba は、「奇妙なものとなる」「分断された」「不在」とも訳すことができる。
- 24 スンナ派の六大真正ハディース集成のうち、『スナン集成 (Al-Sunan)』は、アブー・ダーウード (888年没)、イブン・マージャ (896年没)、アル・ナサーイー (915年没) が編集したハディース集の名称。ここでの引用元は、アブー・ダーウード『スナン集成』；アル=ハーキム・アル=ニーサーブリー『両真正集の補完 (Al-Mustadrak 'alā al-Ṣahīhain)』。
- 25 原註：アブー・ダーウード (4291)、アル=ハーキム (522、4巻)、また、アル=ハティープ・アル=バグダーディー『バグダードの歴史 (Tārīh Baghdād)』(61、2巻)、またこれらと異なる文言で伝えられた。タリーク・イブン・ワハブからサイド・ブン・アブー・アイユブ、シャラーヒール・ブン・ヤズィード・アル=マアーフィリー、アブー・アルカマに伝わり、アブー・フライラが伝えた伝承。
曰く、「これは^{イスラーム}真正な伝承経路で伝えられた。ムスリムも別の伝承経路で伝えている信頼できるハディースである」。
- 26 クルアーン 10 : 94.
- 27 クルアーン 6 : 114 - 116.
- 28 クルアーン 25 : 44.
- 29 次の中田訳を参照。「イスラームの教えを宣揚し、その遵守を説き、それに反することを禁ずることは、各人の能力と、協力者から得られる助力に応じて義務となる [中田1988 : 18]」。
- 30 原註：これは次の二つのハディースを結合したものである。
一、ムスリム (ナワウィー：21 - 25、2巻) に収録された、アブー・サイド・アル=ハドリー (彼にアッラーのご満悦あれ) のハディースによると、私はアッラーの預言者 (彼にアッラーの祝福と平安あれ) がこう言われたのを聞いた。「忌むべきものを目にした者はその手でそれを変えてみせよ、もしそれができなければ言葉で、もしそれもできないのなら心で。ただしそれは最弱の信仰というもの」。

二、ムスリム（ナワウイー27、2巻）に収録された、アブドゥッラー・ビン・マスウード（彼にアッラーのご満悦あれ）のハディースによると、アッラーの預言者はこう言った。「(中略)ただしそれは、あのような信仰者のそれではなく、辛子種のような信仰というもの」。

31 クルアーン40：51.

32 クルアーン37：171-173.

33 クルアーン5：54.

34 クルアーン24：55.

35 クルアーン5：6.

36 原註：彼らハディースの民と知を持つ者、それに従事する者、それに呼びかける者、確固とした者とは、イブン・タイミーヤの『ファトワー集成』（26、4巻）で明言されている通りである。

37 クルアーン5：51-52, 54.

38 クルアーン6：89.

39 原註：あたかもイブン・タイミーヤは、アブー・フライラ（彼にアッラーのご満悦あれ）が伝えた以下のハディースを指しているかのように思われる。アッラーの使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）次の章句について言った。「もしもおまえたが背き去るならば、彼はあなたがた以外の民を代わりに興される」（クルアーン47：38）。

人々は言った。「預言者よ！われわれと取替えられ、その後われわれのようにはならない、これらの一族とは誰なのでしょう？」

するとアッラーの預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）は「[ペルシア人の] マンクブ・サルマーンの肩を叩いて述べた。

「それは彼の人々だ。アッラーにかけて〔述べる〕と、もし信仰が星にかかっていたとしても、ペルシアの人々はそれを取りに行くだろう」。

イブン・ジャリール『註解書』（42、26巻）、アル＝バガウィー『スンナの解釈（*Sharh al-Sunnah*）』（200、14巻）、またこの二人以外も伝えられた。ムスリム・ブン・ハーリドが、アル＝アラー・アブドゥルラフマーンから伝わり、彼がその父から伝えられたハディース。

40 クルアーン9：38－39.

41 クルアーン47：38.

42 後にタイミーヤが述べるように、ジハードには四つの類型があり、(一) 知、(二) 崇拜、(三) 戦闘、(四) 富、をもつ民がそれである。この「支出」は、(四) 富の道でのジハードを指す。

43 クルアーン24：55. また「地を継がせる」というのは「勝者、王者となす」という含意がある〔中田考監訳『日亜対訳クルアーン』、386頁：註1325〕。

44 原註：アル＝ナワース・ビン・サマアーン（彼にアッラーのご満悦あれ）によるアル＝ダッジャールについてのハディースの一部。ムスリム（63-75、18巻）に収録されており、またその他にも収録されている。

45 原註：これはブハーリー（ファトフ：194、1巻、282、13巻）、ムスリム（ナワウイー：223-225、16巻）、そしてこれらと異なる文言でも収録されている。

伝えられたところによると、

一、アブー・フライラ（彼にアッラーのご満悦あれ）のハディース。

アル＝タバラーニーの『中心（*Al-Awsat*）』、また『語彙（*Al-Mu'jam*）』（101、1巻）、イブン・タイミーヤ『四十（*Al-Arbi'in*）』（ファトワー集成114、17巻）に収録された、アル＝アラー・ブン・スライマーンからアル＝ズフリーに伝わり、アブー・サルマが伝えたハディース。

曰く、これは良好な伝承経路のもの。

二、アーイシャ（彼女にアッラーのご満悦あれ）のハディース。

アル＝バッザール（アル＝カシャファ：233、1巻）、アル＝ハティーブ・アル＝バグダー

ディー『バグダードの歴史』(312-313、5巻)に収録された、ウルワから多数の経路で伝えられたハディース。

曰く、これは真正な伝承経路のもの。
他。

- 46 クルアーンの「写本」のこと。クルアーンは預言者ムハンマドが天使ジブリールより口述で授かったもの。それが製本化されるのは、第三代カリフ・ウスマーンの時代であり、この「本」自体のことをアル＝ムスハフ (al-Mushaf) という。
- 47 al-Amānah という語には責任感や良心といった含意がある。
- 48 原註：ブハーリー (ファトフ：38, 249、13巻；333、11巻)、ムスリム (ナワウィー：167-170、2巻) に収録されている。
- 49 「アッラーが最も知っておられる」「アッラーのみぞ知る」「アッラーはすべて知っておられる」といった意味の表現。

第二部：解題

- 50 佐々木中『夜戦と永遠—フコー・ラカン・ルジャンドル—上』(河出文庫、2011)、447頁。
- 51 イブン・タイミーヤの本名は、Taqī al-Dīn Abu al-'Abbās Aḥmad ibn 'Abd al-Ḥalīm ibn 'Abd al-Salām ibn 'Abd Allāh ibn al-Khiḍr ibn Muḥammad ibn al-Khiḍr ibn 'Alī ibn 'Abd Allāh ibn Taymiyyah al-Ḥarrānī という。
- 52 イブン・タイミーヤは生涯で多くの論著を遺しておりその数は合計341点にのぼる [東長2014：535]。
またイブン・カイム・ジャウズィーヤやイブン・カスィールなどの直弟子があったが、その思想は前近代では長く忘却に晒されていた。しかし近代以降サラフ主義者によって再評価が進み、彼らの積極的な紹介によって蘇生を果たした [中田2002：160 (大塚編『岩波イスラーム辞典』参照)]。
- 53 イブン・タイミーヤ『シャリーアによる政治—イスラーム政治論—』湯川武・中田考訳 (日本サウディアラビア協会、1991)、2頁
- 54 Muhammad A. Abderrazzaq, "Ibn Taymiyah, Taqī Al-Dīn Aḥmad," in *The Oxford Encyclopedia of the Islamic World*, ed. John L. Esposito (Oxford: Oxford University Press, 2009), 502.
- 55 Ibid., 502.; 湯川・中田訳 (1991)、8頁。
- 56 前掲書、8頁。
- 57 「ハディースの徒 (Ahl al-Hadith)」は主にハンバル派によって担われる神学的立場であり、法解釈におけるハディースの扱いをめぐって「自由推論の徒 (Ahl al-Ra'y)」と対立する [松山2015：25]。神学的にハディースの徒は、聖典の引用に加えて理性による論証を併用するアシュアリー学派やマートゥリーデー学派と異なり、聖典の引用による議論の展開を重んじ比喩的解釈を制限する傾向にある [Ibid., 497]。松山洋平によれば、ハディースの徒は学派としての統一性が低く [Ibid., 52]、その内実は大きくわけて「ハディースと伝承の徒、および、スンナと思弁神学における議論を禁じたサラフに追従する者たち」と「ハディース学者の中の思弁神学者たち」の二つの潮流があり、タイミーヤは後者の代表的な学者として位置づけられている [Ibid., 55]。以上、松山洋平『イスラーム神学』(昨品社、2015)を参照。
- 58 湯川・中田訳 (1991)、9-11頁。
- 59 前掲書、3頁。
- 60 前掲書、3-6頁。
- 61 Intisar A. Rabb. 2009. "Ijtihād." in Esposito. *The Oxford Encyclopedia of the Islamic World*. p. 524. しかし「イジュティハードの門が閉じた」という史的命題を綿密な文献考証を以て論駁した研究もある (See, Wael B. Hallaq, "Was the Gate of Ijtihad Closed?" *International Journal of Middle East Studies*, 16. no. 1 (1984): 3-41.

- 62 中田考『イスラーム法の存立構造—ハンバリー派フィクフ神事編』（ナカニシヤ出版、2003）、22-24.
- 63 アブドル=ワッハーブ・ハッラーフ『イスラームの法—法源と理論—』中村廣治郎訳（東京大学出版会、1984）284頁. その他大同小異さまざまな定義づけがなされているが、ここでは最も簡潔かつ十分と思われるハッラーフの定義を挙げた。
- 64 イジュティハードを行う資格を備えた者をムジュタヒド (mujtahid) といい、通常ムジュタヒドの行為をイジュティハードと言う [小杉1990: 122]。またクルアーンやスンナといった法源、ムジュタヒドの権威ある法判断に従うことをタクリド (taqlid) といい、そのような立場を採る学者はムカッリド (muqallid) と呼ばれる [ハッラーフ1984: 284 (中村による訳註1); 松山2017: 200]。
- 65 湯川・中田訳 (1991)、3-4頁.
- 66 Esposito, *The Oxford Encyclopedia of the Islamic World*, 502-503.
- 67 東長靖「イブン・タイミーヤ『書簡・提題論集』より聖者関連論考—解題、翻訳ならびに訳註—」『イスラーム世界研究』第七巻 (2014)、535頁.
- 68 同論文、534頁.
- 69 湯川・中田訳 (1991)、6頁.
- 70 以上本節は、同掲書、9-11頁を参照。
- 71 参照：中田考 (@HASSANKONAKATA). 「イブン・タイミーヤは真理の徒はどこにいますのしょうと尋ねられて、答えた。『地下（既に死に絶えて）にいるか、あるいは牢獄に、あるいは戦場に。』（イブンタイミーヤはモンゴル軍との戦いに従軍し、使節として敵地にも赴き、最後は獄死している）」2014年10月26日、13:37. Tweet.
- 72 シリアやイラク、イエメンはもとより、イスタンブール、アンカラ、パリ、ブリュッセル、ダッカ、ニース、ベルリン、マンチェスター、ジャカルタ、エジプト各地、ロンドン、テヘラン、バルセロナ、ニューヨーク（その他オランダやカラク、サンクトペテルブルク、ストックホルム等）など、世界中でイスラーム国等のジハード主義組織やそれに感化された個人による攻撃が相次いでいる。
- 73 たとえば、イスラーム国の公式メディア「アル=ハヤト」からは“From the Series of Al-Ghuraba: The Chosen Few of Different Lands”というシリーズものの広報動画が公開されており、また『グラバー』という有名な宗教歌を唱和するイスラーム国戦闘員の動画も動画共有サイトに出回っていた。参考のために、『グラバー』の歌詞を訳出しておく。
- グラバー、グラバー、グラバー、グラバー
 グラバー、グラバー、グラバー、グラバー
 我らはグラバー、アッラー以外に頭を垂れぬ グラバー、我らが人生の指針
 我らは圧制者など恐れぬ 我らはアッラーの戦士たち、永遠に我らが道は尊厳の道
 グラバー、グラバー、グラバー、グラバー
 グラバー、グラバー、グラバー、グラバー
 囚われても構わない、永遠に向かおう 囚われても構わない、永遠に向かおう
 我らは何度でもジハードを戦う グラバーこそか 奴隷の世の自由な人
 幸せだった頃を思い出す 朝も夜も書物を読誦していた
 幸せだった頃を思い出す 朝も夜もアッラーの書を読誦していた
 グラバー、グラバー、グラバー、グラバー
 グラバー、グラバー、グラバー、グラバー
- 74 イブン・タイミーヤが布告した礼拝に関するファトワーによると、礼拝を守らない者は「処刑」とある [湯川・中田1991: 174-183]。
- 75 中田 (1988)
- 76 イスラーム国のみならずサラフィー主義者にとってイブン・タイミーヤは準拠される学者

である。イスラーム国とイブン・タイミーヤについての関係については以下を参照。アブドルバーリ・アトワーン『イスラーム国』春日雄宇訳、中田考監訳（集英社インターナショナル、2015）、213 - 214頁；サーミー・ムバイヤド『イスラーム国の黒旗のもとに一新たなるジハード主義の展開と深層』高尾賢一郎、福永浩一訳（青土社、2016）、32頁。

- 77 内藤正典、中田考『イスラームとの講和—文明との共存をめざして—』（集英社新書、2016）、46 - 51.

引用文献一覧

〈日本語文献〉

- アトワーン、アブドルバーリ『イスラーム国』春日雄宇訳、中田考監訳（集英社インターナショナル、2015）
- イブン・タイミーヤ、タキーユッディーン『シャリーアによる政治—イスラーム政治論—』湯川武・中田考訳（日本サウディアラビア協会、1991）
- ハッラーフ、アブドル=ワッハーブ『イスラームの法—法源と理論—』中村廣治郎訳（東京大学出版会、1984）
- ムバイヤド、サーミー『イスラーム国の黒旗のもとに—新たなるジハード主義の展開と深層—』高尾賢一郎、福永浩一訳（青土社、2016）
- 大塚和夫編『岩波イスラーム辞典』（岩波書店、2002）
- 小杉泰「現代におけるイスラーム法と『立法』—イジュティハードをめぐる考察—」『国際大学中東研究所 紀要』第四号（1989—1990年）
- 佐々木中『夜戦と永遠—フコー・ラカン・ルジャンドルー 上』（河出文庫、2011）
- 東長靖「イブン・タイミーヤ『書簡・提題論集』より聖者関連論考—解題、翻訳ならびに訳註—」『イスラーム世界研究』第七卷（2014）
- 中田考「イスラーム『復興』運動の理念—イブン・タイミーヤのハディース注釈を手がかりに—『イスラームは少数派として始まった』ハディース注釈の解説をかねて」、日本サウディアラビア協会報137（1988）4-11頁
- .『イスラーム法の存立構造—ハンバリー派フィクフ神事編—』（ナカニシヤ出版、2003）
- 内藤正典、中田考『イスラームとの講和—文明との共存をめざして—』（集英社新書、2016）
- 松山洋平『イスラーム神学』（昨品社、2015）
- .『イスラーム思想を読み解く』（ちくま新書、2017）

〈外国語文献〉

- Esposito, John L. et. al. *The Oxford Encyclopedia of the Islamic World*. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Hilālī, Salīm ibn ‘Id al-. et. al. *Al-Ghrba wa al-Ghuraba*. Dammam: Dār al-Hijrah lil-Nnashr wa al-Tūziā’, 1989.
- Hallaq, Wael B. “Was the Gate of Ijtihad Closed?” *International Journal of Middle East Studies*. 16. no.1 (1984): 3-41.
- Ibn Taymīyah, Taqīyuddīn Aḥmad. *Majmu‘ah al-Fatāwā*. Beirut: Dar Ibn Hazm, 1997.

Abstract

Strangeness and Strangers: Translation and Bibliographical Introduction on the Hadith Commentary Essay from “Majmū‘ah al-Fatāwā” on “Blessed Are the Strangers” by Ibn Taymīyah

Koki Ishigohoka

We are able to understand contemporary Jihadist thought and, in particular, the justification of terrorist attacks through the term *Ghurabā*. Prophet Muhammad said, “Islam began as something strange (*Gharīb*), and it will return to being strange as it began, so blessed are the strangers (*Ghurabā*).” The terms *Gharīb* and *Ghurabā*, which are referred to in the Hadith, are derived from the common root *G - R - B* in Arabic and its root-verb *Garaba*, which originally meant depart, leave and absent. *Ghurbah*, which was derived from the same root, means alienation, desolation, or dreariness; the term also means estrangement and forlornness. On the other hand, *Gharīb*, which is referred to in the Hadith, is equivalent to strange; its agentive plural noun *Ghurabā* is translated as strangers. This word also has the following meanings: outsiders, foreigners, and aliens. It also has the following strong connotation: people who are alienated. This word was translated into Japanese by Ko Nakata as minority. In this paper, the author has translated Ibn Taymīyah’s commentary essay on the Hadith.

Salafi-Jihadists perceive themselves to be strangers and in the minority. Furthermore, they identify with the majority of Muslims as apostate or disbelievers when they do not follow them. Therefore, when the majority of Muslims condemn the Islamic State (aka ISIS/ISIL) as “the Islamic State is neither Islamic nor a state, and they are not Muslim but terrorists,” it is not effective but does strengthen their conviction that they are true as *Ghurabā*. The author referred to this to as a “perverted sense of Ghuraba.”

In this paper, the author translated Ibn Taymīyah’s text to understand the

logic in part one. Furthermore, there is a discussion on how to explain it in the context of contemporary Jihadist thought in the bibliographical introduction in part two.

Keywords: Ibn Taymiyah, Salafi-Jihadism, Strangers, Ghuraba, Perverted sense of Ghuraba